

目次

凡例	……………	三
あ	……………	五
い	……………	三九
う	……………	六九
え	……………	八二
お	……………	八四
か	……………	二六
き	……………	一四三
く	……………	一五四
け	……………	一六六
こ	……………	一六九
さ	……………	二九
し	……………	三三三
す	……………	二五四
せ	……………	二六八
そ	……………	二七二
た	……………	二八八
ち	……………	三〇四
つ	……………	三一
て	……………	三三三
と	……………	三三八
な	……………	三四六
に	……………	三八四
ぬ	……………	三九一
ね	……………	三九三
の	……………	三九五
は	……………	三九八
ひ	……………	四一七
ふ	……………	四三四
へ	……………	四四四
ほ	……………	四四六
ま	……………	四五三
み	……………	四六五
む	……………	四八三
め	……………	四八六
も	……………	四八七
や	……………	五〇四
ゆ	……………	五二四
め	……………	四八六
よ	……………	五三二
ら	……………	五四四
り	……………	五四四
る	……………	五四四
れ	……………	五四四
ろ	……………	五四四
わ	……………	五四五
ゐ	……………	五四六
ゑ	……………	五三三
を	……………	五三三
〈付〉		
『古今和歌集鄙言』の仮名遣い——オ・ヲの場合——	……………	五九
『古今和歌集鄙言』俗語訳における「こそ」について	……………	五七五
『古今和歌集鄙言』の副詞について	……………	五八五
あとがき	……………	六〇四

あいそつかす「連語」

ひよつとさきからあいそつかしたら	14	七二七
あいそをつかして三津寺へいて	18	九七四
あかい(赤)		
◎大かた野べの草木をあかう染るのでかな有ふ	5	二五八
此川の水が赤うなるほどじやによつて	16	八三〇
◎今み山からながれ落ちてくる水の色をあかいのをみて	5	三一〇
しろい鳥のくちばしとあしとあかいやつが	9	四一詞
ないて居る血の涙の色をあかいのは	19	一〇〇六
あかい(明)		
◎秋のよの月の光ハいつよりもあかいものじやによつて	4	一九五
あかしのうら(明石浦)		
明石の浦のけしきを見よふと思へど	9	四〇九
あかす(明)		
◎月を明してひるになれば	13	六一六
◎月をもみずになくもなうねて明す人も有であらふが	4	一九〇
同じやうにないて秋のよるくをあかす事でハ有ぞ	4	二一三
あかつき(暁)		
スリヤ暁の雲のどくらにやどつて有ことじやしらぬ	3	一六六
暁はどういつらいものハない	13	六二五
暁にハしきがはたきをしげうするものじやが	15	七六一
あかつきがた(暁方)		
おきてわかれたあかつきがたの聲じやによつて	13	六四一
あかばる		
◎おもひの火で色もえるやうにあかばるで有ふ	12	五七二
あがる(上)		
◎ずつとまへかたの通りで上りまして	18	一〇〇〇

あき(秋)

↓もえあがる		
いぬる夏と来る秋と行ちがふ空の通り道ハ	3	一六八
秋が通る方のかたかハ	3	一六八
秋がきたといふことが目にはつきりと	4	一六九
秋も大かたあの波といつしよにたつたものでかな有ふ	4	一七〇
すゞしうて心よい秋の初風じや	4	一七一
秋を待て牽牛さまに御逢なされるハ	4	一七五
ものごとにしんきな秋が来たとおもふことじや	4	一八四
をれほど秋のかなしいものハないといふやうに	4	一八五
秋のかなしいものハない	4	一八五
世界一とうの秋が来たのに	4	一八五
をれゆへにくる秋でもないのに虫のなく音をきくと	4	一八六
秋ハかなしいものじや	4	一八七
秋になるとよるハこのやうに涙で露の置たやうに	4	一八八
をれひとり秋でハないけれど	4	一九三
世界一とうの秋で	4	一九三
その月のかつらも秋ハやはり此世界の木のやうに	4	一九四
秋もよるハ露がまことに格別さむいそうな	4	一九九
此秋の野であそび過して	4	二〇一
此秋のく人にまつといふ名の有松虫のこゑがするハ	4	二〇二
ないて秋のよるくをあかす事でハ有ぞ	4	二一三
べつして秋ハきつう心ほそい事じや	4	二一四
その秋の中でべつしてかなしい時分といふハ	4	二一五
秋ハぜんたいかなしい時節じやが	4	二一五
秋の比野辺でふと行あふて	4	二一九詞
秋も末になつたによつて	4	二二四

此秋の野にをいた白露ハもと玉と見える	4	二二五
とまり所ハ秋の野の事じや	4	二二八
よそでねるなら秋のくにとまるべき事じや	4	二二八
女郎花が此秋の野の風に何の子細もなしになびくが	4	二三〇
秋でなければ逢にくい女郎花じやナア	4	二三一
たれがモフあいたといふ秋でもないのに	4	二三二
女郎花を吹過てくる秋の風ハ	4	二三四
毎年く秋になるとかのはかまのうつり香て	4	二三九
秋の野にたれがぬぎかけてをいた藤ばかりまじやぞい	4	二四一
とかく秋といふものハかなしいものじやによつて	4	二四二
秋のけしきが心ほそうてなんぎなものじや	4	二四二
秋の野の草のたもとか花ずきハ	4	二四三
秋になつてからみれば色々の花でハ有ことじや	4	二四五
此秋の野があんまりおもしろうてならぬゆへ	4	二四六
とんと秋の野原でござりまする	4	二四八
御馳走にせんざいを秋の野のけしきにつくつて	4	二四八詞
吹とやがて秋の草や木がをれふしたり	5	二四九
とんと秋といふ物ハない事じや	5	二五〇
秋になるとみなそれく色がかハるけれども	5	二五〇
時節が秋じやと云ことを	5	二五一
秋がきても木のはの色もかハラぬ	5	二五一
秋のしるしがにによつて	5	二五一
西が秋のはじめて来る方じやによつての事じやな	5	二五五
どふして秋の木の葉をいろくさまく	5	二五七
あきの露ハ白一色でハあないと見える	5	二五九
秋にハえこたへずに色がかハつたナア	5	二六二
秋の霧ハたつのがやうじやによつて	5	二六六

あいそつかす—あき

秋ハもふふかうなつた事じや	5	二六七
秋といふものがない時が有たらさかぬで有ふが	5	二六八
秋にさへなつたらいつまでも末ながう咲であらふ	5	二六八
秋のなしいといふものハないによつて	5	二六八
とかくいつまでも年のよらぬ秋に久しうあふやうに	5	二七〇
秋の一さかりハさしをきまして	5	二七九
ことしもマア秋ハ来たし	5	二八七
秋のみぢが風にそふてちるによつて	5	二九〇
此かみなひのみむろの山を秋の比通れバ	5	二九六
たつた姫ハ秋の神さまじやが	5	二九八
秋の山でハもみぢのちるのが	5	二九九
秋もその通りに神なひ山を過て行によつて	5	三〇〇
秋の末つかたこのはの散てういてゆくのを	5	三〇一
水の秋をマアたれがしらふぞい	5	三〇二
山田の番をする秋の借やにをいてある露ハ	5	三〇六
今さら出たといふても秋ハしまふ	5	三〇八
秋ハもふしまいじやと思ふてあふ人の為	5	三〇九
秋ハしまひになつたと合点しぬいた事じや	5	三一〇
大かた秋のとまるみなとでかな有ふ	5	三一〇
あの鹿の鳴やまぬうちに秋ハくれてしまふでかな有ふ	5	三一〇
秋ハ旅立していてしまふたわい	5	三一三
秋の比までハ紅葉でも見にくる人も有たが	6	三一五
秋が来て木木の葉の色もかハラぬといふ	7	三六二
秋の萩のさいである此野原で	8	三六六
そちハ秋の別がおしうハないかいやい	8	三八五
此秋のしぐれもふるが	8	三九八
秋が来たこれでハ今のまに	10	四三二